永井荷風と植草甚一の日記を読む

仲俣暁生
（文芸評論家）

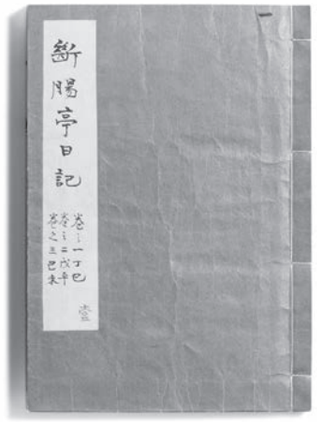
終生反俗的な文明批評家としての姿勢を貫いた文豪・永井荷風と、モダンなライフスタイルを戦時中も維持しつづけた評論家の植草甚一。二人の個人主義者が綴った日記は、読み物としても近代史の資料としても、第一級の価値をもっている。二〇世紀という時代を定点観測した二人の眼差しに迫る。

永井荷風の「日乗」（日記の意）は一九一七（大正六）年九月一六日から、死の前日である一九五九（昭和三四）年四月二九日の絶筆「祭日。陰。」まで、ほぼ毎日欠けることなく綴られた。

荷風の日記は、少なくともある時期からは発表を前提として書かれており、生前にも度々その一部が公刊された。「日記」「日録」「日歴」などその呼び方は変転したが、岩波書店版『荷風全集』に収められた後は、『断腸亭日乗』という「著作」として扱われることが定着している。

『断腸亭日乗』がもつ文学的価値はなにより、関東大震災（一九二三年）から満州事変（一九三一年）、二・二六事件（一九三六年）、日中戦争勃発（一九三七年）、太平洋戦争開戦（一九四一年）とその敗戦（一九四五年）、そして戦後の復興にいたる四十余年の生活史を、文学者の視点で持続的に記録した一事にかかっている。

荷風の「日乗」が彼の他のいかなる小説作品よりも愛され、長く読みつづけられるのは、二〇世紀前半という時代を定点観測する装置だからだ。同時代から一歩身を引いた隠遁者・荷風だからこそ、大正から昭和前半という激動の時代の冷徹な証言者となりえたのだった。



『断腸亭日乗』の原本。戦中、空襲の最中であっても、荷風は日記原稿を携え記述を続けたという。

「断腸亭」とは、一九一六年に牛込区大久保余丁町（現・新宿区余丁町）の邸内にしつらえた小庵の名で、自ら断腸亭主人と号し庭に断腸花（秋海棠）を植えた。しかし荷風はほどなく邸宅を土地ごと売却し築地に転居、さらに一九二〇年には麻布市兵衛町（現・港区六本木一丁目）に洋風建築「偏奇館」を建て居を移す。荷風がもっとも愛した場所はこの館である。

四二年にわたる『日乗』の記述のうち、「断腸亭」時代に書かれたものは一年三カ月分でしかない。「断腸亭」とはどこか具体的な場所の名ではなく、どこに住まおうと消えることのなかった、この日録のことだったのではないか。

人嫌いの厭世家、あるいは同時代に背を向けた江戸風味の戯作者、という自己像を「日乗」を通じて荷風は演技しつづけた。しかしそうした人物像の向こうに私たちは、どのような激動の時代にあっても自らのペースで暮らしつづけた、一人の偉大な生活者の姿をみる。

敗戦の報を聞き「恰も好し」

『断腸亭日乗』において荷風がもっとも饒舌になるのは、一九三二年から一九三三年にかけての時期（巻一六～一七）で、一日分の記述が長いのみならず、荷風自ら描いた風景画や地図、人物や街のスケッチが多数さしはさまれている。戦前昭和でもっとも豊かなこの時代に、モダニスト荷風はもっとも人生を楽しんだろう。

だが昭和初期のモダンな都市文化は、まさに偏奇館の膝下で一九三六年に起きた二・二六事件をひとつの節目として暗転する。

その二日前、荷風は「日乗」に遺書の草案を記している。曰く、

一　余死する時葬式無用なり。死体は普通の自働車に載せ直に火葬場に送り骨は拾ふに及ばず。墓石建立亦無用なり。

以下、全七か条。そして翌日には例によって「銀ブラ」を楽しみ、次のように書く。

蓄音機屋の店頭に人多く立たずみ三味線くづれとやら云ふ流行唄を聞けり。日未だ暮れやらぬ時、銀座通の人のゆききと蓄音機の俗謡と貧し気なる建築物とはいかにも浅薄なる現代的空気をつくりなしたり。

しかしこの「現代的空気」を荷風はそれほど嫌っていただろうか。

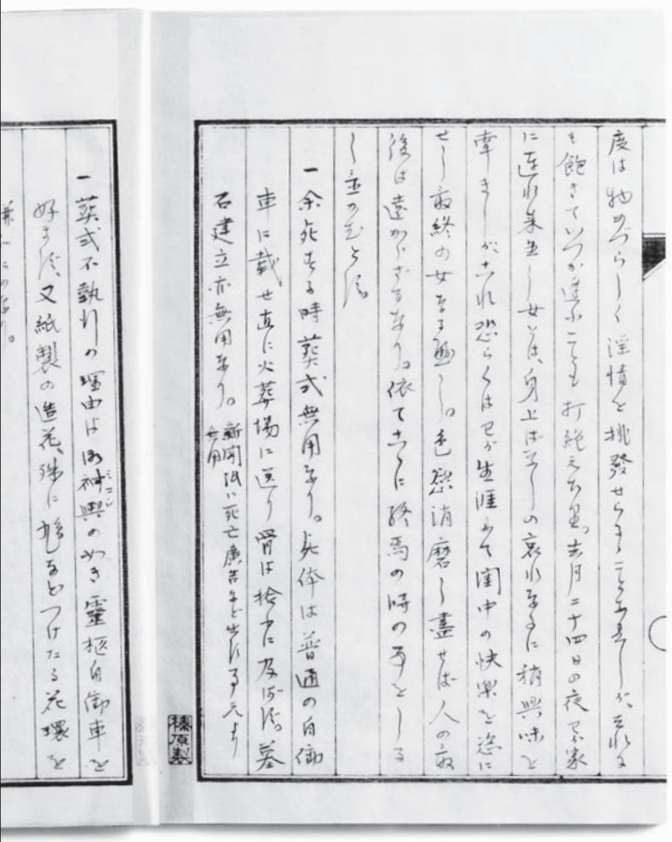
翌二六日は大雪。反乱軍となった麻布連隊が「偏奇館」周辺にも展開していた。「市中騒擾の光景を見に行きたくは思へど降雪と寒気とをおそれ門を出でず」と記した翌日にはさっそく「午後市中の光景を見むと門を出づ」とある。野次馬に交じって反乱軍をひやかしたあとは「三越にて惣菜を購ひ茶店久辺留に至る」。ここで反乱軍にまつわる街の噂を聞き、また野次馬と歩く。

虎の門あたりの商店平日は夜十時前に戸を閉すに今宵は人出賑なるため皆燈火を点じたれば金毘羅の縁日の如し。

縁日のような華やかさに浮かれる気分と、二日前の「遺書」の気分が同居するのが荷風の日記の魅力であり、昭和初期の日本の現実だったのだろう。

周知のとおり、偏奇館は一九四五年三月一〇日の東京大空襲により炎上焼失。もはや命よりも大切な「日乗」を納めた鞄を抱えた荷風はなんとか難を逃れ、代々木、明石、岡山と居を転々として岡山にて敗戦を知る。「今日正午ラヂオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ」。

多くの作家が戦時下日記を書いたが、敗戦の報を聞き「恰も好し」とすぐに酒宴を開いた荷風の自由主義者ぶりは徹底している。


荷風の遺書の草案が書かれた、1936（昭和11）年2月24日の日記。

この続きは本誌でどうぞ！